

感謝の気持ちを次につなげよう

副団長 吉田 淳史

素晴らしいチームワーク

今年、46歳になった私であるが、これまで海外へ出掛けたことがなく、今後も出掛けることを考えていなかったが、平成24年4月に新設されたシティプロモーション推進部都市魅力創造発信課に配属となり、国際交流を所管することとなった。

本市は、昭和34年4月7日にドイツのアウクスブルク市と日独間最初の姉妹都市提携を、昭和58年2月2日には中国の鞍山市と友好都市提携を締結している。アウクスブルク市とは、昭和46年から相互に青年使節団の派遣を繰り返しており、昨年度までに本市から15団150人を派遣するとともに、アウクスブルク市から18団210人を受け入れている。そうしたなか、今年度は本市から青年使節団を派遣する年になっており、その副団長として、私が任命されたのである。

海外旅行経験のない私としては、初めての海外ということに加え、尼崎市の代表として訪問するにあたり、中川団長を支えるとともに、公募し、かつ試験で選考された大学生7人の団員達を上手くまとめ、有意義な派遣にすることができるかといった大きな不安があった。しかし、アウクスブルク市やドイツの諸事情、ドイツ語会話に加え、青年使節団のOB・OGとの懇談など事務局である中川係長と成さんが企画してくれた計7回の事前研修のおかげで、そうした不安も少しずつ解消していった。

また、事前研修が回を重ねるにつれ、大学生7人も次第に打ち解け、団員同士のつながりも深くなり、アウクスブルク市で行うフェアウェルパーティーでのピンゴゲー

ムの景品を全員が手分けして購入するなど、チームワークができつつあるなか、出発の日を迎えることができたことを、喜んでいる。(フェアウェルパーティーの席上、アウクスブルク市長から「グッド パフォーマンス」とのお褒めの言葉をいただいたが、これも団員達がそれぞれの特技を生かしながら、役割分担を行うなどチームワークの素晴らしさを認めていただいたからではないかと考える。)

出発日当日、全団員が集合時刻よりも早く集った関西国際空港で、尼崎市青年使節団のさらなるチームワークの深まりと有意義な派遣を願い、(有)尼子事務所様からいただいた「忍たま乱太郎ストラップ」を手渡すなか、団員一同、喜びと期待を胸に、ドイツへと出発した。



【浴衣の帯に「忍たま乱太郎ストラップ」をつけてフェアウェルパーティーに臨む団員達】

素敵なお宿ファミリー

関西国際空港を出発してから15時間、ようやくベルリン空港に到着した。その日は夕食を済ませ、そのままホテルへと向かい、

翌日はベルガモン博物館やベルリンの壁博物館、ブランデンブルク門など、ベルリンでのプログラムを終え、ドイツ3日目の午後、ミュンヘン空港に到着した。各自、荷物を受け取り、到着ゲートをくぐると、アウクスブルク市職員のエッガー氏とミュラー氏、そして通訳の原氏が温かく出迎えてくれた。

先に到着していた長浜市青年使節団とともに、記念撮影を行ったのち、バスへ乗り込み、ホストファミリーの待つホテルアルペンホーフへと向かった。車内での団員達は、事前にメールのやりとりをしていたとはいえ、初めてお会いするホストファミリーの方々との対面が刻一刻と迫るなか、次第に不安と緊張が高まってきているように見えた。

ホテルに到着したのは午後4時を少し回っていた。早速、団員達は各自、これからお世話になるホストファミリーのテーブルへと向かった。ホストファミリーの方々が、最高の笑顔で団員達を迎えてくれたことで、団員達の不安と緊張は一瞬にして消え去ったようで、どのテーブルも、話が弾んでいるのを拝見し、団長ともども、まずは一安心したのを覚えている。



また、30分ほど経過した頃、「団員をよろしくお願ひします」と各テーブルを回ったが、笑顔で頷きながらの力のこもった握

手は、「分かりました。お任せください。」との気持ちの表れであると感じ、私自身、とても安心した。

なお、今回、お世話いただくホストファミリーは、いずれも今年の3月にアウクスブルク市青年使節団として、尼崎市を訪問した経験を持つ元団員とその家族ということもあり、日本語を話す人もいるとともに、とても好感の持てる素晴らしい青年達で、また、団員同士の強いつながりが今もなお残っているように感じた。

アウクスブルクでのプログラム

アウクスブルク市に滞在した8日間は、あっという間に過ぎ去るほど充実した毎日であった。市長表敬訪問をはじめ、大聖堂、図書館、マーケット、動物園、植物園の視察などに加え、アウクスブルク市職員やホストファミリーの心温まるおもてなしのおかげで、本当に有意義かつ貴重な経験をする事ができたと団員一同、感謝している。

私自身、数多くの思い出に加え、帰国後、尼崎市の魅力づくりに向けた取組の参考にしたいと感じたことがあるが、そのなかで、街への愛着が深まるという点で、特に印象に残っている「プレラー市民祭り」と「オーバーアマガウ」について、紹介する。

「プレラー市民祭り」

プレラー(Plärrer)とはビアホール(ビールテント)と遊園地が一体となった、オクトパーフェスト(10月にミュンヘンで開催されるビール祭り)の小型版のようなイベントである。具体的に言うと、本格的な観覧車などの乗り物、ゲームや食べ物の屋台に加え、ビアホールがあり、子どもからお年寄りまでが楽しめる入場無料の移動遊園地である。

私達が訪れたのは平日の昼間であったが、本当に多くの人で賑わっていた。私達が最初に向かったビアホールには、ホストファ

ミリーである元団員達が民族衣装を着て駆けつけてくれ、一緒に昼食を楽しんだ。それから移動遊園地へ行き、乗り物の説明を受けるとともに、実際に乗車させていただき、乗り物好きの団員達は大喜びであった。



また、偶然にも、アウクスブルク市長がピアホールにお越しとのことで、再度、ピアホールへ案内された。3,000人近い来場者を前にした市長の挨拶のなかで、尼崎市と長浜市の青年使節団を紹介して下さるとい嬉しいサプライズがあり、尼崎市のPRに一役買っていただいた市長に感謝している。



「プレーヤ市民祭り」は、市民が一体となり、街への愛着が深まる本当に素晴らしいイベントである。本市において、このような大規模な祭りを実施することは難しいが、アウクスブルク市との姉妹都市関係の

PRも含めたイベントの実施に向け、今回、アウクスブルク市を訪問した団員達と連携しながら、検討を進めていきたいと考えている。

なお、アウクスブルク市に「アマガサキアレー」という名の通りがあることに感激したが、アウクスブルク市との姉妹都市関係の周知という点では、本市でも例えば、「アウクスブルク通り」や「アウクスブルク広場」といった名称をつけることができないか、検討したいと考えている。

「オーバーアマガウ」

「オーバーアマガウ」は、ドイツ南部、バイエルン州最南端、ドイツアルプスの北麓にある、美しい壁絵と木彫が有名な人口5,000人強の村である。今回1時間程度、散策を行ったが、景観が素晴らしく、歩いていて本当に心地良かった。

また、「オーバーアマガウ」では、10年に1度、村を挙げて大規模なキリスト受難劇が行われており、そのことが「オーバーアマガウ」を何より有名にしている。このキリスト受難劇であるが、1633年のペスト流行の際、「オーバーアマガウ」では奇跡的に被害が少なかったことを神に感謝し、1634年から村人達の手で始められた。それ以来、10年ごと（1680年から最終桁に0がつく年）に上演されている。

この劇の特徴としては、出演者は村の出身者が長年の住人に限られており、いわば素人芝居ではあるが、10年に1度の祭りとあって、ヨーロッパ中から多くの観光客が押し寄せている。「オーバーアマガウ」の歴史は、パッションシアターで開催される10年ごとのキリスト受難劇とともに流れてきたと言え、常にそこに住む村人達の手によって作られていったとも言われている。

本市では現在、シティプロモーション推進部都市魅力創造発信課を中心に、尼崎の魅力を上向きさせる取組や地域資源の掘り起

こしを行うよう努めているが、「プレー市
民祭り」に加え、「オーバーアマガウ」の取
組は、街への愛着と誇りを深める上で、と
ても興味深く、参考にしたいと感じた。今
後、例えば、本市の歴史を尼崎の子ども達
が演じる「あまっ子ミュージカル」といっ
た取組を検討していきたいと考えている。

おわりに

団員達の報告を読んでいただいても分か
るように、アウクスブルク市滞在中、本当
に多くの方々が温かく接して下さり、団
員一同、感謝の気持ちでいっぱいである。
また、「これからも彼らとのつながりを大切
にしていきたい」、「アウクスブルク市の
方々との交流は一期一会ではなく、いつま
でも続く関係にしたい」、「自身の交流を保
ち、学習を深め、周囲に認識を広めていき
たい」といった思いに加え、「アウクスブル
ク市との交流がこれからも続いていくよう
に私が参加できることがあれば、参加して
交流を続けていきたい」、「次にアウクスブ
ルク市の青年使節団が来た際には、心から
日本のおもてなしをしたい」、「次の青年
使節団へとつながるように、国際交流にど
んどん参加していきたい」、「後輩に青年使
節団への参加を促したい」といった声があ
り、頼もしく思っている。

そうしたなか、団員達には、今年3月に
尼崎市を訪問したアウクスブルク市青年使
節団のおもてなしはもちろん、団員同士の
つながりの強さをいつまでも忘れないでい
てほしい。また、既にホームステイの受入
を表明してくれている団員もいるが、今回
受けた恩を次のアウクスブルク市青年使節
団に返すことで、受けた恩を次に送るとい
うサイクル、“恩送り”が続いていくことを
強く願っている。

最後になるが、エッガー氏、ミュラー氏、
サボロフスキー氏、イルスペルガー氏、原

氏をはじめとするアウクスブルク市関係者
の方々、そして団員達を本当の家族のよう
に温かく接して下さったホストファミ
リーの方々。また、独日協会のコーナート
氏、アウクスブルクインターナショナルの
方々、視察先の方々、挙げるときりがなが
い、本当に多くの方々の素晴らしいおもて
なしのおかげで、私達、尼崎市青年使節団
は、有意義かつ貴重な経験をするとともに、
多くの友人、楽しい思い出、多くの学びな
ど大きな収穫を得、元気に帰国することが
できたことを心から嬉しく思っている。こ
の場を借りて、ご尽力いただいた方々に改
めて御礼申し上げます。

そして、今回の青年使節団の派遣にあたり、
平日の夜間や休日にも関わらず、事前
研修において、熱心にご指導いただいた講
師の方々、ご助力をいただいた事務局をは
じめ、本市関係者の方々にも感謝申し上げ
たい。